

令和2年度第1回富山市総合教育会議 会議録

1 日 時 令和2年11月25日(水曜日)
午前10時 開会
午前11時 閉会

2 場 所 本庁8階 大会議室

3 出席者 富山市長 森 雅 志
富山市教育委員会
教育長 宮 口 克 志
委 員 若 林 啓 介
委 員 藤 井 久 丈
委 員 尾 畑 納 子
委 員 高 田 健

事務局関係

教育委員会事務局

事務局長	牧 田 栄 一
事務局次長 (総務・社会教育担当)	山 本 貴 俊
事務局次長 (学校教育担当)	大久保 秀 俊
教育総務課長	石 黒 健 一
統合校整備等推進室長	豊 島 栄 治
学校施設課長	佐 伯 誠 司
学校教育課長	國 香 真紀子
学校保健課長	長 康 博
生涯学習課長	金 井 誠
教育総務課主幹 (課長代理)	中 山 武 史
教育総務課管理係長	余 川 毅
教育総務課主任	春 田 圭 介
教育総務課主事	宮 成 暁 音

企画管理部

企画調整課長	刑 部 博 規
企画調整課主幹	岸 聡 之

4 議題 「富山市立小・中学校の適正規模・適正配置に関する基本方針」について

5 会議の要旨

○開 会

○市長あいさつ

○議題 「富山市立小・中学校の適正規模・適正配置に関する基本方針」について
教育総務課長から、下記の点について説明を行った。

- ・今年度の取り組みとして、広報とやま 8 月 5 日号での情報提供、市民アンケートの結果、児童生徒及び教職員アンケートの結果について（資料 1～3）
- ・市立小・中学校の適正規模・適正配置に関する基本的な考え方について審議を行った通学区域審議会の開催状況と答申内容について（資料 4）
- ・通学区域審議会の答申を受けて作成した「富山市立小・中学校の適正規模・適正配置に関する基本方針（案）」の内容について（別冊）

○意見交換

【森市長】

問題の認識というか問題意識については、皆さん等しく共有していただいていると思っている。適正規模に向けて進めていくことはもう避けられないわけだが、既存施設の活用や、プライオリティー（優先順位）をどうしていくかなどについてご意見を伺いたい。

やはり複式学級があるところは急がなければならないだろうし、一斉にできないので緊急度の高いところからということが一つである。地元の理解が得られたところからというアプローチの仕方もあるだろうと思っている。

状況をよく見据えていかないといけないが、まず今のコロナの影響で、国の経済そのものが大きく、かつて経験したことのないくらい落ちると見込んでいる。3月末の決算や5～6月の株主総会で何が出てくるかによって、非常に厳しい状況になるだろうし、まず失業者は大幅に増えるだろう。したがって、地方交付税の原資である法定4税が令和3年度は大きく落ちると思う。交付税が大きく落ち込む上に、文部科学省の学校に関する予算も満額確保できるかどうかで考えると、非常に厳しいのではないかと。

一方、適正規模に向けて全市的に動き出すわけなので、しっかりと予算を確保していくことが必要である。そのためには、例えば今の水橋のように、地域から積極的に小学校5校と中学校2校の統合へという声が上がったことについては、文部科

学省も応援してくれるだろうと思うので、そういうところから進めていくことがよいと思っている。

私の立場としては結局予算の問題であり、適正規模の必要性は認識しているが、順番に切れ目なくやっていけるかという点、今言ったような諸般の事情を考えるとなかなか難しい。だから、やはりプライオリティーの問題があると思う。そして、小規模校2つを1つにしてどちらかの校舎を使うというようなケースはやりやすいが、まとめると施設のキャパシティが足りなくなって新設や増築が必要となれば、大規模改修や耐震化をしてきただけに、やはり難しい。施設についても一つの要素として考えなければならないと思う。校舎をそのまま使えるところなども、プライオリティーは高いと思っている。

附属小学校の児童は、ものすごく遠くから来ている。小さな1年生でも、こんな距離を歩いてくるのかという子がいる。だから、「望ましい」通学時間なのであって、必ずしもそれが実現できないところだって当然あるわけである。小さな小学1年生が附属小学校から市役所までずっと歩いてきて、ここでバスに乗っている子もいるので、やればできるといった感じがしないでもない。

方針案については、教育委員会としてもいろいろと今までご議論いただいてきたと思うので、まず提案どおり定めていただいて、その上で具体の事業をどう実施していくかというのは、単年度、単年度の予算等を踏まえて、教育委員会で決めていただければよいかと、私の立場としてはそう考えている。

私が中学へ入ったときは、下村からも来ていた。下村に中学校がないので、すごく遠い距離を自転車で通ってくる子たちがいた。私の学年では、古沢小学校からの同級生が21人いたが、彼らは今も仲がいい。小規模校のよさというのは、ある意味生涯につながる人間関係という部分でもある。だから、小規模校を一概に全否定もできない。一方で、標準規模に向けていくということは、教育の質という観点からいうと、どうしても避けられないと思うので、この方針案の文言や表現の部分で何かご意見があれば。結論は、方針案の18ページにあるようなまとめ方でいいだろうと思うが。

全学年1クラスの学校が20校もあるというのには、ちょっと驚いている。

【藤井委員】

学校規模の適正化は、大きな決断の時期に来ている。森市長が以前からよくおっしゃっているように、やはり高齢化がどんどん進んで人口がどんどん減っているときに、従来どおりでいいのかということのを思いながらもなかなか決断できなかった事項であった。今回コロナのこともあって、もう一度振り返る機会となり、教育とは一体何かということや、地域を守っていく、維持していくというSDGsの考え方で見ると、このままではいけないという意識が大分浸透してきている。おまけに、

今度のGIGAスクールも背景にあるが、ITやIoT、AIなど、何となく将来のことだと思っていたことが既に間近に来ているということを人々が実感してきている。それが、今回、子どもたちや地域の方、教職員へのアンケートの結果として表れており、こういうふうの方針を打ち出すことは非常にいいことであるし、ようやくこのような結論に至ったということである。

ただ、問題は経済的な状況等いろいろあるので、すぐに来年に全部収まるという話ではなくて、少しずつ進めていかなければならないと思う。森市長が市長になられて最初の富山市中心部の学校統合から始まって、この方針は、今まさに適正化が本格的に動き出したということの表れであり、そういう意味では大きい話だと思っている。

【森市長】

今藤井先生がおっしゃった、市中心部の7校を2校に統合したときは、地域にご理解いただいたのだから思い切っていい校舎をつくろうということができた。今、それは、とても財政的にできないと思う。だから、まずはなるべく既存の施設に統合してもらおう。その上で、絶対それができないところについて次に考えるということになるのだろう。

その中でも、例外的に、水橋は地元がまとめてこられたわけだから、何よりもこれはきちっとやるということだと考えている。

【尾畑委員】

方針案はこれで大賛成で、いろいろなところに「検討」や「配慮」という文言が見える。先ほど市長もおっしゃったように、小規模でも、例えば山田小・中学校では非常に仲がよい。それから進学率が決して低くない。そういうところもあるので、方針としてはこういう形で進めていかなければならないが、せめて「よいところは残す」、「生かしていく」ということも配慮していく必要があると思っている。

今、10年、20年先の試験をやるような、実験的な意味で、まず複式学級や全学年単学級の学校から手をつけるということなので、しっかり今後を見据えていただくことと、もう一つは、コロナでオンラインというのが浸透してきて、設備の充実を通して教育環境を整備していくことについてももっと考えながら、それこそ特色を出していくような方法をぜひ打ち出してもらいたいと思う。標準規模の学校はよいが、小規模校であっても選ばれる学校、そういう教育環境の工夫という点でも、もっと努力していかなければならないのではないかな。

変えていくにあたって、配慮しなければならない点はしっかりと踏まえていただきたいと思っている。

【森市長】

全く同意見である。「二十四の瞳」の大石先生のような人がいて、みんな仲よく、そういう小規模校のイメージというのはやはりあって、それはそれで大事なことだと思う。一方、合併する前、旧婦中町の時代に音川中学校を城山中学校に統合して、当時もなかなか大変だったのではないかと思う。城山中学校の校舎をそのままにして、スクールバスでというやり方をされたので。また、今統合に向けて進んでいる八尾の2つの中学校の統合は、地元からの要望があって、そういう地元の思いを尊重しながら進めてきたということがある。地元の人たちによっても温度差があり、どうしても中学校を残してもらわなくては駄目だという意見も当然あったかと思うが、この辺りを腕力ではできないので、時間をかけて進めてきたのだろうと思う。そのような先行して再編を進めた地域の皆さんと意見交換会をやるとか、統合の前に子どもたちの交流の機会をつくるとか、魚津ではそれを盛んに行ったようだ。例えばそういうことを仕掛け始めていくことも大事だろうと思う。

【若林委員】

この基本方針案については格別異議を申し立てるつもりはなく、このような考え方で進めていくことが必要だろうと思っている。

水橋が一つのいいモデルケースになり得るだろうと思う。水橋は南北が6km、東西が4kmくらいあると思うが、この中で小学校5校と中学校2校が一緒になるので、これが一つの物理的な距離の目安というか指標にはなると思う。

ただ、富山市の周辺部の場合は、この物理的な距離にこだわっていると、なかなか適正規模の実現が難しい。特色ある学校を残すという考え方ももちろん重要だとは思いますが、やはりもう一つ考えなければいけないのは、市長が冒頭におっしゃったような施設の維持管理コストの問題だと思う。これはインフラの維持と同じような考え方でもある。例えば、この方針案の4ページに児童生徒1人あたりの施設維持管理コストがあるが、それこそ小規模校では、大規模校、標準規模校と比較しても、小学校では倍以上、中学校では2.5倍程度の費用がかかることを考えると、やはりこれからの財政状況を考え、その限られた財源の中でいかに効率を上げてよい教育をしていくかということは非常に重要である。既存の感覚にあまりとらわれることなく、極端なことを言うと、一体全体何校あればいいのかというような発想も、私は必要なのではないかと考えている。例えば、700人規模ぐらいの義務教育学校を標準的な学校のサイズとすれば、四十数校あれば、現在の3万人ぐらいの小中学生を全て収容することが可能なわけで、それはやや極端な話だが、そういう財政面からの検証というのも非常に重要になってくるのではないかと。

水橋では、2022年に先行して三郷小学校と上条小学校を一次統合し、それから、2026年には統合校ができるであろうというスケジュールが示されており、

実現に向けた基本的な考え方が相当早い段階で出てくると思うので、これを一つのモデルケースとして今後の展開の中に取り込んでいくのが重要になってくるのではないか。

【森市長】

そのとおりである。もう一つ、水橋は、かつて水橋町だったという一体感が底辺にあるからまとまりやすい。ところが、そうではない、例えば婦中の朝日小学校と古沢小学校を統合する、それはとてもまとまらない。だから、住民感情を重視して、ピザや羊羹を切るような感覚ではできない。その辺りの難しさも一方では考えなければならぬだろう。

先ほど言った中心部の7校を統合したときには、対象として実は柳町小学校も視野にあったが、地元はどうしても統合しないとおっしゃって残っている。交通量の激しい道路があることなども反対の理由だったわけだが、その柳町で今児童数が少なくなってきてしまっている。なるほど、あのとき統合しておけばよかったと、そう実感できるまでにはタイムラグがある。だから、30年先、50年先の話ではないということについても、説得していかなければならないのではないか。

【高田委員】

小規模校は小規模校なりのよさがあり、私も学校訪問に行かせていただいて、学年問わず仲がよかったりしてよいと思うが、方針案にあるように、やはり人間関係という意味では、限られた人数の中で切磋琢磨する機会が少なく、大人になったときに対応できないということも出てくると思うので、適正規模に向けた統合は進めていくべきだと思う。

私はいわゆる大規模校で小中を過ごしてきたので、それはそれなりのよさもあると思うが、方針案にあるような21人以上だとか、適正な数の中でいろいろな活動を経験することが子どもに対しては一番よいと思う。今ほど市長が言われたような地域性とか地域感情というものもあると思うが、やはり子どもの教育環境を最優先にしていくべきである。基本方針については、私は本当にこのとおりに進めていくべきだと思う。

【宮口教育長】

市長にご指摘いただいた統合前の交流としては、私が学校教育課長、次長をしていたころ、まず小見小学校と福沢小学校について、非常に素直で勉強もできる子どもたちだったが、上滝中学校へ行ったときに大きなうねりの中に飲み込まれるのではないかという心配があり、2校の交流を始め、今も「元気な学校創造事業」の予算を使いながらずっと続けている。それに加えて、呉羽地区の池多小学校と古沢小

学校の子どもたちも交流をしており、これも呉羽中学校という大きな環境の中に小規模な学校の子どもたちが入学したときに圧倒されることのないように、子どもたちのよいところをそのまま伸ばしていくには教育環境をどうすればよいかという視点で進めてきた。今回、そうしたことも踏まえつつ、適正規模化を進めていきたい。また、委員の話や冒頭の市長の挨拶にもあった「教育の質」について、環境を整えるだけではなく、教員の質の向上、教育の質をどう担保していくかという点で、今年度から新たな研修等も進めているところなので、新しい教育ということも考えながら、先生方の質を高めていきたいと思っている。

もう一点、今ほどおおむね基本方針案にご同意いただいたわけだが、これについては5年程度でまた見直しをかけながら進めていく必要があると思っている。というのは、現状はこうだが、さらに少子化が進み複式学級が増えるということも想定される。現時点でも、複式学級のある学校が数年後には2校増えて10校になるという見通しが持たれているところである。方針の見直しをかけながら、その時々での適正化を皆さんにもお諮りして進めていきたい

【森市長】

今、1学年3,000人ぐらいか。

【宮口教育長】

3,100～3,400人ほど。中学校3年生で3,500人ぐらい。

【森市長】

以前は倍以上はいたのだから。今、県の教育委員会が第2次高校再編をやられて、あれは1学年6,000人ぐらいという前提だが、もう激しく減少しているので、同じことがやはり小・中学校にも言えるのかもしれない。

それでは、一通りご発言いただいたところで、これは議決が必要か。

【石黒教育総務課長】

この場ではご意見をいただき、この後の教育委員会定例会で議決させていただく。

【森市長】

それでは、よろしく進めていただくように。

全員総論的には同じ思いなので。

【若林委員】

そのとおりである。何とかしなければならぬ状況だと認識している。

【森市長】

これから単年度ごとに、どこから優先順位をつけてやっていくかということ、大変苦勞が多いと思うが、よろしく願いしたい。

○閉 会